クリック オピニオン

半田生まれの作家　小栗風葉

泥酔姿に漱石一喝の真相は

小中陽太郎

こなか・ようたろう　1934年神戸市生まれ。作家、日本ペンクラブ理事。元中部大教授。小説「翔べよ源内」で昨年の第1回野村胡堂文学賞を受賞した。

蔵の町、愛知県半田市は文学の里でもある。読者もよくご存じの「ごんぎつね」の作者、新美南吉。もう一人、尾崎紅葉門下の四天王とうたわれた小栗風葉誕生の地でもある。風葉は半田の薬種商・美濃半の長男として1875年、呱々の声を上げた。幼少から江戸文学を耽読、16歳で上京。紅葉は私邸において教育した。

風葉20歳の作品がふるさとの造り酒屋を材にとった「亀甲鶴」である。主家の箱入り娘に思いを寄せ、身を粉にしてはたらき、利用されたと知った杜氏が大桶の熱酒に身を投ずる悲恋物語だが、今読んで関心を引くのは、当時の酒造りの過程を蔵開き、櫂入れと正確に描写していること。そのままで銘酒「亀甲鶴」ができたほどである。

代表作「青春」では、明治の女学生を描いて満天下の子女を熱狂させた。また近年、「半田空襲と戦争を記録する会」の佐藤明夫氏などから「下士官」などの作品の社会性が見直されている。

この風葉が酔って夏目漱石を訪問、一喝されたという挿話を門弟の寺田寅彦から漱石の鏡子夫人までが書き残している。漱石門下の森田草平が風葉を誘った。風葉は鰻屋で腹ごしらえをして一杯きこし召したのがいけなかった。押しかけられた漱石は、下戸の上に「行人」の執筆に行き悩み、ご機嫌斜めだった。「ばか。かえれ」となったという。真相はいかに。風葉は酒好きだがあまりつよくなかった。筆者の妻は風葉の姪に当たる。

来年、風葉生誕140年を迎える記念会を「小栗風葉をひろめる会」が来る9月14日午後2時から半田で開くので、筆者は、会の代表の美濃半五代目、小栗忠彦氏と、この酒乱論争に決着をつけようと考えた。

京都漱石の会会員の安諸靖子さんに当時の事情を解説していただく。それから森田のこれまた姪と結ばれている文芸評論家、北村隆志氏に森田の人柄を聞く。ちなみに森田は青鞜社の平塚らいてうと心中未遂をして文壇から追放されかかり、漱石が救いの手をさしのべた。風葉未亡人の籌子は青鞜社に加わっている。

会場は風葉の生家の近く、彼がたびたび泥酔した料亭「末廣」の大広間で会費は500円。風葉の妹を母とする哲学者、梅原猛氏の新作能で笛を演じる名古屋の藤田六郎兵衛氏に一曲手向けていただく。そのあと「古扇楼」で秘蔵の「亀甲鶴」を開けてみよう。